

<祈りのすすめ>

「家造りらの捨てた石、これが隅のかしら石となった」(マタイによる福音書 21:22)

エルサレムの神殿の祭司長や民の長老たちは、イエスが神殿の境内で商売をしていた人々を追出したのを見て、「何の権威でこのようなことをするのか」と問い詰める中で、イエスはぶどう園のたとえ話で答えられます。

このたとえの概要は「家の主人がぶどう園を作り、農夫たちに貸して旅に出た。収穫を受け取るために、僕たちを農夫たちに送ったが、農夫たちは僕たちを、一人を袋だたきにし、一人を殺し、一人を石で打ち殺した。他の僕たちを前より多く送ったが、同じ目に遭わせた。最後に主人は自分の息子を送った。農夫たちは、彼は跡取りだと言って彼の相続財産を我々のものにしようとして、ぶどう園の外に放り出して、殺してしまっただ」という内容です(マタイ 21:33-39)。

ここに遣わされる僕は、イスラエルの旧約の預言者のことです。神は時が来るたびに、預言者をお遣わしになったのです。しかし、イスラエルの民は、この預言者たちを排除したのです。そして最後に、神の独り子イエス・キリストを遣わされたのです。ここから、「神の相続権を奪い取る」というたとえ話を聞いた祭司長や民の長老たちは、自分のことだと悟って主イエスを殺そうとしたのです。

イエスは、詩篇 118 篇を引用して「家造りらの捨てた石、これが隅の親石となった。これは、主がなったことで、わたしたちの目には不思議に見える」(22, 23 節)と語られます。神の御子が捨てられることによって、隅の親石となるという神の奇跡が起こるのです。イエスは神に背

く民に、ご自分の主権を行使なさいます。ご自分を世俗の権力に引き渡して捨てられるという仕方です。こうして、キリストの復活が世界に広がるのです。これが神の主権的行為です。

これに対して、日本キリスト教会の前身はどうだったのでしょうか。旧日本基督教会の第一回大会を開催した日は、「帝国議会創設の歳」の1890年11月29日、開会の第1回議会(常議会開催中に「教育勅語公布」と同じ日時であり、明治国家近代化幕開けと並行して日本基督教会を建ち上げたのです。これはキリストではなく、世俗の権威を土台に据えようとするファリサイ派と同じ道ではなかったのでしょうか。

そして日本の偶像信仰と侵略国家に密着して敗戦を迎えたのですが、神の前に犯した教会の罪を真剣に問うことなしに今日に至っています。

イエスは、神の主権を行使することによって、罪と邪悪の犠牲になって捨てられることによって、罪と邪悪を滅ぼされたのです。捨てられた石が親石となって人を支える土台となったからです。これが、アブラハムから始まるイスラエルの契約の歴史です。神の民の歴史はイザヤが叫んだように、イスラエルの不従順のゆえに国が滅亡した償いをキリストが担う歴史です。これが、頭であるキリストの体の肢体である礼拝者が継承しているのです。この世界の歴史は、基盤がないためにいつも揺らいでいます。しかし神の民の歴史は、基盤のある揺るがない歴史です。人間の罪悪の行為によって押しつぶされながらも、根底から支えているからです。

<祈り> 主よ、この世の権力すべてが幻想であり、最も小さくて弱い者のもとに降りて来てくださるあなたの御子こそが、真に畏れる者であることを覚える者にしてください。

川越弘(沖縄伝道所牧師・大会靖国神社問題特別委員会委員)

新シリーズ『いま なぜ 大嘗祭か』を読みなおす（25）

（桑 広国、くめひろくに；大会靖国神社問題特別委員、函館相生教会牧師）

Q20 キリスト教会では靖国神社問題とどのように取り組んできましたか？

A キリスト教会の靖国神社問題への具体的な取り組みは、1960年代後半、靖国神社国営化に反対する運動から始まりました。その前に、靖国問題と一連のものとして出てきた紀元節復活に反対する取り組みもありました。各教派にも靖国神社問題に取り組む委員会が設けられ、政教分離・信教の自由を守る戦いとして取り組まれてきました。署名活動、国会議員への説得、諸教会・団体との共闘などの取り組みの中から、この戦いに関わるキリスト教会の神学的立場が問われてきました。ただ単に政治問題への関心として取り組むだけでなく、信仰告白の戦いとして、キリストの主権に仕える者の戦いとして位置づけられ、また関心の強い個人の取り組みだけでなく、これを全教會的な取り組みとすることが目指されてきました。

1970年代後半になり、靖国神社問題が国会を中心とした法案反対運動からもっと幅広い運動として取り組まれてきました（1974年6月靖国神社法案廃棄以降国会に提出されていない）。町のヤスクニという表現で、日常性の中にある靖国問題、思想・信教の自由の問題と取り組むことが大切にされたのです。そこで教会はあらためて従来の教会の歩みとその体質を問わざるを得ませんでした。いま、靖国神社問題国営化に反対するばかりでなく、あの戦時下において教会は何をしてきたのか、あらためてキリスト教会の歴史とその体質を問われています。

さらには元号法（1979年成立）へ御取組みの中で、あらためて「天皇制」問題が出てきました。明治以来教会はこの問題といかにと取り組んできたのか、否いかに取り組んでこなかったのかが問題となってきたのです。そしていま、新天皇が即位しようとするなかで、教会はいかなる信仰を告白し、主を信じ、主に仕えるものとしてかにその証しのつとめを果たすかが問われています。わたしたちは歴史の支配者なる主に向かって告白的な信仰に生きる教会です。この時、この国にあって、キリスト告白をおびやかす様々な勢力のうごきを黙って見過ごすことはできません。

新 Q20-1 日本キリスト教会のこれまでの靖国神社問題に対する取り組みは理解できました。しかし今はほとんど靖国神社とその活動がメディアで取り上げられることはなく、人々の関心も薄く、靖国神社そのものを知らない世代も増えて、もう靖国神社問題に取り組む必要はないのではないのですか？

A 確かに今「靖国神社」が取り上げられるのは一部の国会議員がと特定の日（8月15日や例大祭）に参拝して、玉串料を捧げたことをメディアが取り上げた時くらいです。靖国神社に祭られている軍人軍属の遺族も高齢化し、日本遺族会も以前のような勢いはなく、政府自民党も靖国神社の国家護持を断念したかに見えます。しかし安倍政権を支えた政治勢力が日本会議のような反動的国粋団体であったこと、国会議員の多くがこの政治連盟に名を連ねていることから分かるように、決して

予断は許されません。安倍政権を継承した菅政権も学術会議に一部の人の任用を拒否したようにまだまだ監視を続ける必要があるのです。

新 Q20-2 いま日本には靖国神社問題よりも深刻な社会問題が多くありますが、日本キリスト教会はそれらに取り組むべきではありませんか？

A 日本キリスト教会では大会人権委員会を設けて、靖国神社問題に限らない人権問題に取り組んでいます。しかし私たちに、諸問題に追いつかないのが現状です。しかし私たちには、特定の委員会だけに任せるのではなく、一人一人が主体的に問題意識を持ち、信仰に基づく愛から苦難の中にある人々のために祈り、教會的に取り組む姿勢が必要です。無関心や傍観は問題の解決にはならず、信仰生活を損なうのです。

眞子さんと小室圭さんの結婚問題から天皇制を考える

井上 豊 (大会靖国神社問題特別委員会委員、広島長束教会牧師)

眞子さんと小室圭さんの婚約内定発表が行われたのは2017年9月3日、小室さんは「海の王子」ともてはやされましたが、同年12月、小室さんの母親と元婚約者の間の金銭トラブルが報道されたことから祝賀ムードが暗転し、今日に至っています。18年2月6日、納采の儀をはじめとする結婚関係諸儀式が延期、同年8月に小室さんはアメリカの大学に留学。20年11月13日、眞子さんは文書で、「様々な理由からこの結婚について否定的に考えている方がいらっしゃることを承知しております。しかし、私たちにとっては、お互いこそが幸せな時も不幸せな時も寄り添い合えるかけがえのない存在であり、結婚は、私たちにとって自分たちの心を大切に守りながら生きていくために必要な選択です」と述べ、改めて結婚への意志が変わらないことを表明しました。同月20日、秋篠宮文仁親王は、婚姻の自由を保障した憲法の規定を理由に二人の結婚を容認する気持ちを明言しました。しかし日本国内では、応援する声と共に不満の声がかなりあります。この問題を人権を切り口に考えてみましょう。

20年12月3日、伊吹文明元衆議院議長は「皇族方は人間であられて、そして大和民族・日本民族の一人であられて、さらに日本国と日本国民の統合の象徴というお立場であるが、法律的には日本国民ではあられない」とし、憲法を盾に婚姻の自由を述べた秋篠宮発言を牽制しつつ、結婚を認めない考えをおわせました。皇族が国民であるかどうかは学者の間でも議論が分かれるところですが、皇室典範の上に日本国憲法があり、かりに皇族は国民でなかったとしても人権は世界どこにおいても普遍的ですから、二人の結婚を法的なところで否定することは出来ません。

日本の歴史の中でこれまで皇族に対する批判はさまざまあったわけですが、今日、ニュースが瞬時に広がり、またSNSが発達し、誰もが匿名で自分の意見を発表できるために、小室さん、眞子さんのもとより秋篠宮家へのバッシングがたいへんな規模になっています。私はなにも日本が、人々がこぞって皇族を崇めるような社会になってほしいとは思いません。自由な社会であれば皇族への批判があつて当然です。しかし昨今、皇族への崇拜の裏返しとも言うべき人権無視の言動がまかり通っているのは問題だと考えます。

「小室さんはお金や地位や名誉が大好きな人間で、それを目当てに結婚するんだらう」という見方がありますが、だったらこれが男女逆転した場合はどうでしょう。女性がハイレベルの男性と結婚しようとするのはよくあることで、小室さんばかりが批判されるのは公平ではありません。

「秋篠宮家は教育がなつとらん」とか「国民の税金で暮らしているくせに」と言うこと自体は自由ですが、こうした批判がさらにエスカレートし、皇族は奴隷のように国民の意に従うべきだとなっています。これが「偶像」の悲しさで、それまでの雲の上の人たちが一挙に最下層の人たちになっているのです。眞子さんが一億四千万といわれる結婚一時金を受け取るかどうかわかりませんが、少なくとも警備費は必要です。ネット上には「小室を消せばいいじゃないか」という投稿もありました。

以前、雅子さんが病気がちで公務がままならないこともあつて、SNS上では皇太子の時の徳仁さんと雅子さん、愛子さんを揶揄するような投稿が多くありました。現在はこちらの一家には称賛の声が多く、逆に秋篠宮家に対しては罵詈雑言です。「小室問題」の延長で、「姉の一個人としての希望がかなう形になってほしい」と当たり前のことを言った佳子さんもバッシングされ、「秋篠宮家を天皇にしてよいのか」という議論も出てきました。もしも悠仁少年が次の天皇になるべきでないとすれば愛子さんなのか、そうなるとあくまでも男系にこだわる人々と女性天皇や女系天皇を認めようとする人々の間で大混乱が起こることが予想されます。

私はいまの日本で、皇室に敬意をいづく人が減りつつあり、いま徳仁天皇たちを称賛する声も、いつ風向きが変わってバッシングに転ずるかわからないと思っています。眞子さんと小室さんの結婚問題をきっかけに、天皇制のゆらぎが見えてきましたが、ただ、この二人が責めを負う必要はありません。結婚して幸せになればよし、不幸になったとしてもすべて本人たちの責任です。皇族に婚姻の自由が保障されず、国民がそれを尊重しない、そんな天皇制に何か価値があるのでしょうか。

<ヤスクニ問題関連ニュース>

○これこそ不要不急！ 国旗損壊罪は提出すべきではない…江川紹子の提言

自民党は、日本を侮辱する目的で日の丸を傷つけたり汚したりする行為を処罰する「国旗損壊罪」を新設する刑法改正案を、今国会に議員立法として提出する方針を固めた、と報じられている。同法案によれば、違反した者は「2年以下の懲役又は20万円以下の罰金」。コロナ禍をなんとか収めることに全力を尽くすべきこの時期に、表現の自由と真っ向から対立するイデオロギー法案を出そうという発想自体が理解しがたい。(ビジネスジャーナル「江川紹子の事件ウォッチ第170回」：2021.02.01)

○辺野古新基地を「自衛隊が共用」の密約が発覚！

沖縄を呪縛し続ける辺野古新基地の計画は、水面下で根本的に変質していた。四半世紀の間ずっと、沖縄県民が聞かされてきたのはこんな三段論法だった。

(1) 米海兵隊の普天間飛行場は日本の安全保障に不可欠 (2) だが宜野湾市のど真ん中であって危険すぎる (3) だから人口が少ない名護市に新基地を造って移す――。

近年、計画推進の中心人物となってきた菅義偉首相は官房長官時代から宜野湾市民の命を人質に取り、「危険性の除去が原点」「唯一の選択肢」と、計画の受け入れを迫ってきた。

ところが。新基地は海兵隊だけでなく自衛隊も使うことが判明した。陸上自衛隊の離島専門部隊「水陸機動団」を常駐させる極秘合意を、在日米海兵隊のニコルソン司令官と岩田清文陸幕長(いづれも当時)が2015年に結んでいた。

沖縄タイムスと共同通信の合同取材に、複数の陸自幹部が本音を漏らしている。

<編集後記> かつて「日本の国、まさに天皇を中心としている神の国であるぞということを国民の皆さんにしっかりと承知して戴く、そのために我々が頑張ってきた」と発言した森喜朗元首相。今回は、天皇中心の国家観が、女性蔑視と分かちがたく結びついていることを教えてくれたように思う。(K.K.)

「将来、辺野古は実質的に陸自の基地になる」
(AERA：2021.02.02)

○「建国記念の日」を考える

2月11日は「建国記念の日」、ではその建国の年は西暦何年だったかという、紀元前(BC)660年である。縄文時代の晩期に当たる。文字のなかった時代、どうしてそんなことが分かるのだろうか。答えは日本最古の歴史書『古事記』『日本書紀』によるという。

この二書「記紀」は8世紀の初めに、神武天皇以来の天皇家の歴史的記録として作られた。歴史書だから、紀元(出発点)となる初代の神武天皇の即位の年が必要となる。

その際、用いたのが中国古代の予言説である「讖緯説」だ。当時は年を数えるのに十干(甲、乙、丙…癸)と十二支(子、丑、寅…亥)を組み合わせさせて使ったが(60年で一巡し還暦となる)、讖緯説ではそのうち58番目の辛酉(かのと・とり)の年には大変革が起こり、さらにその辛酉の年が21回くりかえされた年には決定的な変化が起こる、とされていた。

そこで直近の重大変革のあった辛酉の年はと見ると、聖徳太子が政治・宗教の大改革に踏み出した西暦601年がその年だ。それから60年を21回、すなわち1260年をさかのぼると、西暦で紀元前660年となる。この年こそが歴史の始まり、神武天皇の即位の年だったにちがいない、と先の二書の編纂者たちは考えたのである。(梅田正己署名記事、しんぶん赤旗:2021.02.11)

794号ヤスクニ通信 2021年3月14日 発行 日本キリスト教会靖国神社問題特別委員会 発行人・編集・発行 小塩海平(東京告白教会)
